実践女子大学 実践女子大学短期大学部
下田歌子研究所 ニューズレター No. 08
2017年1月

下田歌子が二代目の校長を引き受けた淡海女子実務学校 - I

藤堂 泰脩

あかねさす　紫野行き　標野行き
野守は見ずや　君が袖振る

現存の旧淡海女子実務学校校舎

万葉の女流歌人額田王が歌に詠んだ蒲生野の一画、琵琶湖畔から少し奥まった湖東平野（現滋賀県東近江市五個荘竜田町）に役割を果たしたかのように古びた校舎が静かに佇んでいる。それが旧淡海女子実務学校である。

明治の歌人であった下田歌子（敬称略）もかつて遙か遠い万葉歌人に思いを馳せつつ、全校一杯に弾けるように活動する若い女生徒を見やり、日本の女子教育の未来へ思い巡らしていたことであろう。

またこの学校には、地域の女子の地位向上を目指し創設した塚本さと初代校長の理念（おもい）の面影が今も残されている。

「あふみ」の読みは「おゝみ」である淡海（あわうみ）の語源の変化で、漢字では「近江」を当てる。

学校名の由来もこの地名をとって淡海（たんかい）と称し、この地域の女子教育の一翼を担って誕生したのは、大正八年四月八日（一九一九年）のことである。

先ず創設者である塚本さとを紹介する。

「近江商人の妻であった塚本さと」

塚本さと
淡海女子実務学校創設者

塚本さと（以降さと）は、幕末の天保十四年（一八四三年）八月八日生まれ、偶然にも誕生月日は下田歌子（安政元年一八五四年八月八日生）と重なっている。

父は一代で屈指の近江商人となった塚本定右衛門、母妙聚（法名）の末娘（五女）として、現東近江市五個荘川並に生まれた。母は嘉永三年さとが八歳の折四十七歳の若さで、父も万延元年さと十八歳の折に死別する。

母の遺言で、さとはそのまま塚本家において一家を構えることになる。両親の死後は長兄の二代目定右衛門（以降隠居名定次）が父親代わりとなり、また、他の兄弟姉たちに囲まれて育った。この定次も代表的な近江商人であり、幕末から明治への激動の時代に事業を大きく飛躍させた人物である。次に、さとの生い立ちに関わる近江商人を知っておきたい。

二代目塚本定右衛門
さとの兄 定次

「近江商人の特質」

江戸時代は当時の藩経済で（注1）あったため、全国各地で各藩が経済活動を営んでいた。その藩の経営に貢献し深く関わったのが近江商人で、近世経済史では伊勢商人ともどもよく登場する商人集団である。

その商業活動は「諸国産物廻（まわ）し」（現在の商社機能）である。たとえば、当時の女性化粧品の口紅は山形最上地方特産の紅花から作られたが、それを紅餅という原料に加工し、京へ運ぶ廻船（運送）、さらに京の加工技術で口紅、頬紅や染料にして各地で販売される。近江商人は、そのオルガナイザー役を務める。こうした事例は全国各地で見られた。

旅姿

もう一つの特徴と言えるのは、全国各地で商業活動をしながら、本拠地はあくまでも故郷の近江（滋賀県）にあることである。今でいう本社機能と同時に、そこに一家家族が在住している。そのため、主人は商いで各地へ往来するが、必ず故郷へ帰るという習慣があり、必然的に主人不在中は妻が代わりを務める。特質は他にも多々あるが省略する。

こうしたことは塚本定右衛門家も例外ではない。

さとは、女児ながら十三歳まで、近所の寺子屋に通い、女庭訓（女子一般教養）や読み書き等を習得した。以降必修の料理、裁縫、余技には琴を習い、姉たちに日常のこと諸々を教えられ、二十一歳で一家をもった。結婚以後は商家の妻として主人を補佐する。さとの夫は塚本一族の事業に加わった。（注2）

「近江商人の妻の役割」

かつては「妻の内助の功」という言葉がきかれた。今

では段々と死語になりつつあるが、近江の場合は、内助というよりも主人と共に進む車の両輪であり、補佐と言うべきであろう。

商家の家族

一家を守るという役割の第一は、次の世代に向けた嫡子の育成、また子女もこれに準ずる。地方の店に行く新入社員教育（読み書き算盤）と、一人ひとりの性格を把握し、適材適所への進言。商内取引先、主人の商いの地元でのフォロー、使用人の日常用品（衣服寝具等）も季節に伴い支給や修繕をし、社員の独立まで行う「お仕着せ」制度。また、行儀見習いの女中（お手伝いさん）の躾、習い事など。そして当然ながら一家の主婦として親族縁者（独立した使用人の家族を含む）等の冠婚葬祭、そして農作業、小作人管理と諸事万端を取仕切る、つまり主人と共に一家の代表者の役を務める。

さとは、この通例以外に、留守がちな塚本一族にあって家族の中心的存在で一族の信頼を一身に受けていた。多忙な中でも、新人教育に京から招いた学者の話を聞き、店員の傍らで共に学問をしている。十三歳で終わった勉学への思いを終生抱いていたようである。

帰郷した夫や兄たちから、時代や世間の変遷、各地の商売に関する情報を得る一方、不在中に得た各地の情報を主人たちに伝えていたという。福澤諭吉の「世界国尽し」などを読んで外国の知識や情報も得ていた。

しかし、当時一般社会では女性の地位は低く、さとといえど外では一歩引いた行動を余儀なくされていた。

兄たちが創る和歌、俳句などに興味があっても、家庭に入った女性が習うことは世間の目を憚り、また晩学だったこともあり匿名で旧使用人に取り次いでもらって添削を受けていた。和歌は京都の服部春樹のほか、下田歌子を師と仰いでいた。

多忙な主婦の座から退いて隠居となったさとの思いは、下田歌子の「女子教育の一般普及への情熱」に共鳴し、商人の妻として今までの経験からも傾倒していった。

一族、一家の陰の中心人物として認められたさとであったが、外に目をやると、自分の思いとは全く反対の多くのことに突当り、商家の妻の立場がこのままで良いのか、地位向上の教育が必要ではという心の中の疑念が少なからず募っていたようであった。

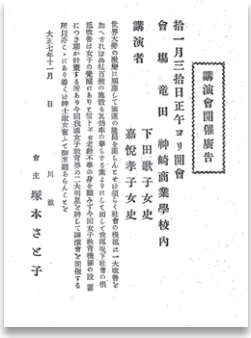
和歌の師でもある下田歌子の中央の活躍は、和歌ばかりでなく子女教育に向けられている声がよく耳に入ってきた。

下田歌子の名の由来は宮中において和歌の才能を認められたことにあり、時の皇后（昭憲皇太后）から賜ったものである。「歌子」の知名度は津々浦々に響いていた。

美濃（現岐阜県）の岩村藩藩士を父に持ち、曾祖父、祖父が儒学者、国学者という家に育った。そのような家の環境が、自然と幼少期から歌子の学問の才能を育んだ。十六歳で故郷を離れて上京し宮中に出仕したが、間もなくその才が認められ、後には高官の子女教育に携わったことから女子教育の道も大きく進展した。ヨーロッパ視察をし、英国のヴィクトリア女王に日本人女性として桂袴（けいこ）姿で初めて謁見し、また、英国家庭での子女達の教育環境にも触れたことが、日本の女子教育の一般普及へ傾斜していったと考えられる。基本は日本女性であって、西洋の模倣ということと意を異にした。明治の終りにかけて中央で私立女学校を起し、一方学習院の女子教育へとフィールドが広がっていき、社会もまた、下田歌子を必要としていった。さとは、この頃一層商家の妻の責務や地位がこのままで良いのか、与えられた重要な立場に教育が必要ではないかという思いが増し、それも下田歌子に傾倒していく大きな要因となった。

「下田歌子との出逢い
歌の師として、女子教育の先達として」

下田歌子は女流歌人として広く知られており、さとも和歌の師と仰ぎ添削を受けたが、それはおそらく明治も三十年代後半かと考えられる。その頃は下田もヨーロッパ帰朝後の教育普及に当たりつつ、学習院の女子教育へと日夜多忙を極めており、さともまた心の中の「女学校」を口に出すことはなかった。歌のみの接点と考えられる。実際に私も二人の学校経営に、そして淡海女子実務学校設立に至る接点の確たるものを得られないままの今日である。


講演會開催廣告

拾一月三拾日正午ヨリ開會
會場　竜田神崎商業學校内
講演者　下田歌子女史
　　嘉悦孝子女史

監督大神の機関に開設として国運の隆昌に寄与せんとせば以て社會の根底は一大改革を知へ、されば女子教育の基礎を支持せ、家庭の事に至るまでいとして両親の恢復者は女子の義務にあり之が為に両親の子女教育機関の設置につき期待する所あり小山長女子教育部の大川長女子等と共に開会する所以なり此段公衆へ御報知あらんことを

大正七年十一月　日
　　川　故
會主　塚本さと子

開校前の講演の広告

しかし、下田歌子は大正八年の淡海開校までに何度となく滋賀の地を訪れて、女子教育のための学校設立の必要性を説き、聴衆にも深い感銘を与えている。講演を聞いた一人の老婦人の手紙に、先生方の話に感じ賤ヶ家故何もできませぬがと郵便切手数枚をさとに送られ、下田、嘉悦先生との通信に使ってくださるようにと、地方の女性に稀な達筆の手紙が添えられていた。この手紙は下田歌子のその折の感想の書簡と共に永く淡海校内に飾られて、創立時の大勢の人の心に感銘を与えた一端を生徒に訓

淡海女子実務学校創立式典写真
左から嘉悦、塚本、下田

えている（現在実践女子大学に保存）。

愛国婦人会や学校経営と多忙な日々の下田歌子たち（嘉悦孝子を含めて）、現在と異なり交通もままならない中、度々往来して協力し、そして学校設立・経営の指導を重ね、開校時のメンバーに名を連ねている。

校主　塚本源三郎（さとの嫡子）
校長　塚本　さと
顧問　杉浦　重剛（倫理学者、東宮教育掛、良宮（後の昭和天皇皇后）教育掛）
顧問　下田　歌子（実践女子大学祖）
顧問　嘉悦　孝子（嘉悦大学祖）

塚本源三郎

その他各界の著名な方（後述）の顔ぶれを見るに教育界での杉浦重剛と下田歌子の接点がさとに繋がったような推論を立ててみるが、これも定かではない。

「さとと下田歌子の校務の日常」

さとは開校に当たって、財政援助を本家の三代目塚本定右衛門以下の一族に仰ぎ、学校経営は息子である源三郎に委ねた。主人源三は大正五年に他界していたが、一族の順風な事業進展を見て、永年心中に抱いていた地域の女子教育に最後の力を傾ける環境は整った。

淡海女子実務学校は大正八年に開校し、さとは七十八歳で初代校長に就いた。これは自ら望んだものではなかったが、自然の成り行きであった。

さと自身は、女庭訓をはじめとする日常の常識が中心とはいえ、和歌も学び、女性としての一般的教養は永年の積み上げがなされている。

七十九歳の時、淡海の最初の修学旅行に生徒を伴い、東京の杉浦重剛邸を訪れた。その折に「一言生徒たちに訓えを」と乞うたところ、「貴女方には近くに『さとさん』という立派なお手本がある、この方が生きた教科書だ」と話されたそうである。こういった類のことは親交の篤かった河上謹一（元住友理事）も言っていた。

さとは、学校では校長という呼ばれ方ではなく「おばあさま」と呼ばせて、それが自分に相応しいと思っていた。卒業に際しては、一人ひとりを自宅に招き、これからの人生の歩みを励ますとともに餞別の歌をそれぞれに与えている。

その中に次の二首がある。

学びやの　庭の姫松　いつかたに
　　うつして千代のかけはみるべき

撫子に　おく露の間も　忘れじな
　　世に咲きいでん　花はいかにと

さとにはまだまだ数多くのエピソードが残されている。そして今もこの地域では「おさとさん」という呼び方で故人は慕われて、また、滋賀の代表的女性（滋賀の二十世紀）として常に登場して紹介されている。

一方、二代目の校長に就いた下田（校長に至る経緯は後述）について、私（筆者）はこの春に実践女子大学日野キャンパスの図書館を訪れ、そこで淡海と、塚本さとの関係資料を見る機会を得た。ここには、昭和五十年代と思える頃、実践女子学園側で滋賀の淡海の調査に来られた際に、さとの孫のとも（注3）から送られた資料もある。

数々の資料の中で私が目を惹きつけられたものは、表紙に「きぬがさ」と書かれた一冊の分厚い手作りの冊子である。中を開くと、和歌がびっしり並んでいて、そこには下田の手によって丹念に朱筆で添削されている。詠み人は、さとをはじめ淡海関係の先生や生徒に塚本一族や近郊の歌人も交えており、学校の機関誌であると同時にこの地域の和歌、文化の中心的役割を持った同人誌の原文であった。

初代のさと校長は淡海に専念することが可能であったが、二代目下田校長は日本中を駆け巡って女子教育向上に努め、また東京の実践女学校や様々な要職で繁忙の最中にあった。それにもかかわらず、このように丁寧に指導の語を加えた添削をする時間を割かれたが、その行動力に驚きと尊敬の念で一杯になった。これは、下田の一度取り組んだことには気を緩めることなく、正面から立ち向かうという姿勢にほかならないとも思った。私も再度訪れてこの「きぬがさ」を拝見することができ、思いを確かにした。

下田の全てを知ることが、こうしたことでもわかる。

（次号へ続く）

（とうどう　ひろのぶ（株）ツカモトコーポレーション資料館聚心庵館長）

＜参考資料＞
・『母のいた場所』千宗之（裏千家第十六世宗家）著　中央公論新社　平成12年2月初版　塚本邸を訪れた折の、母の追憶の中に書き込んでいる。
・私家版『姑の餞別』塚本さと著　淡海高等女学校　昭和6年
・私家版歌集『月の影』塚本さと著　徳集堂　昭和5年
・私家版『紅屋三翁二媼』塚本源三郎著
・『ミューズ塚本：170年のあゆみ』塚本商事編刊　昭和60年1月
・『凛として－近代女子教育の先駆者下田歌子』仲俊二郎著　栄光出版社　平成26年11月
・『妖傑　下田歌子』南条範夫著　講談社　平成6年10月
・『滋賀の20世紀』滋賀県企画課　滋賀20世紀編集委員会編　サンライズ出版　平成13年3月
・雑誌「日本婦人」
・同人誌「きぬがさ」、ほか淡海学校新聞等
・『学校沿革史』神崎ニュース社　昭和60年3月10日
・「女生と文化」第2号：実践女子学園下田歌子研究所　平成28年3月

（注1）藩経済：江戸時代封建制度の下で、将軍から与えられた領地を政治・経済共に藩主が自治した。米本位制度の経済が商業中心に移るにつれて金銀本位に変化していった。
（注2）塚本一族：初代定右衛門から二代目になり、本家を中心とする五家の共同経営体制となる。
（注3）塚本とも（又は友子）：平成十年二月一日没、九十歳。一族で最後まで滋賀五個荘に留まっていた。塚本源三郎の息女、さとの孫に当たる。ともの身辺には、下田歌子や淡海女学校の写真が飾られていた。最後の淡海家政女学校理事。生前、下田に連れられて皇太后の和歌のご進講にお供したと聞いたが、今では再度確かめるすべもない。

岩村町婦人会から岩邑うた子会へ（2）- I
――戦後から現在までの経緯と清掃活動について――

愛甲　晴美

はじめに

前回は岩村町婦人会の創立から終戦までについて、下田歌子先生（以後下田）に関連する事業を中心に紹介した。今回は、戦後変化していく岩村町婦人会（以下婦人会）の活動と、下田顕彰碑周辺清掃がその中でどのように引き継がれていったかを、岩村町婦人会資料（以下婦人会資料）と婦人会役員を歴任された方々の聞き取り調査から検証し、さらに婦人会解散後に岩邑うた子会がこの活動を継承していった経緯と現在の清掃活動を紹介する。なお、資料名は表紙の記載どおりとし、資料からの抜粋記事の表記は、原文のままとする。

戦後の岩村町婦人会から岩邑うた子会設立の経緯

昭和21年3月15日に、戦後の新しい婦人会の結成式第１回の役員会が開かれた。鷹見八代会長は、『昭和二十一年三月　記録簿　岩村町婦人會　永久保存』の序言の最後に「二十一年三月十五日より岩村町新婦人會と称し役員も改選して新日本建設の為力強い新鮮な雰意氣の下に新発足することになりましたので爰に岩村町新婦人會の會誌を新にする為一言所見を附しました」と記している。

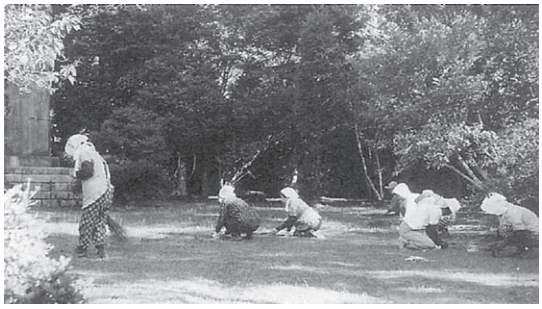
婦人会は昭和21年3月20日に戦後最初の会則を施行している。会の目的は「本町婦人一致團結シテ智德ノ発達心身ノ健全ヲ計リ善良ナル婦女トナリテ克ク國家ノ進運ヲ扶持シ以テ新日本建設ヲ計ルヲ目的トス」とあり、「新日本建設ヲ計ルヲ」の部分が付け加えられた以外は戦前と変わらなかったが、同23年4月1日の改正により、恵那郡連合婦人会会則に準じた「一般婦人の教養を高める為教養、地位の向上に努め、社会的活動を強化し、以て家庭の改善と社会の健全なる発達と共に新日本平和国建設の為に努力するを以て目的とする」と定められた。その後、同24年には「本會は婦人知識の向上と社會的事業を以てその目的とする」と簡略化され、更に同26年「岩村町婦人會が一致協力し婦人の教養と地位の向上に努め家庭を明朗にし民主社會の健全なる発達に努力するを以て目的とする」と変化した。さらに、同28年に同24年の簡略化した文言にもどっている。昭和29年に岩村町と本郷村が合併し、婦人会は本会の下部に、元の岩村町を第一支会、本郷村を第二支会としたとみられる。その後役員任期の変更等で昭和35、44、53年、平成元、2、3、11、13年に改正されるが、目的については、「地位の向上に努め」が削除された以外はほぼ変化していない。このように、婦人会会則は運用面での細かい改変を繰り返しながらも、会の目的は戦後比較的早い時期から大きく変わること無く、着実に組織力を高め、当初の規約に掲げた婦人の社会的地位の向上とともに活動はより地域社会に影響力を強め、様々な取り組みを通じて活動範囲を広げていったものと考えられる。活動資金は会員からの会費、行政からの補助金のほか、昭和31年から婚礼衣装の貸出事業の収益や、昭和58年から開催される岩村町産業祭でのバザーや飲食販売による売り上げ、また知多市野外教育センターを利用した小中学校の林間学校の事前準備業務委託も平成元年から16年まで請け負い、重要な収入源となった。また、会員の教養を高める事業として、戦前から婦人会主催の講演会が開催されているが、戦後も講師を招いての婦人学級が開かれている。内容は料理、衛生、経済、家庭問題、地域の歴史や教育など、実生活に役立つテーマが中心となっている。会員数は昭和30年代最も多いときには約1150名いたが、徐々に減少し平成に入ると800名を下回り、平成16年には352名にまで激減した。これは、人口減少に加え、婦人会の地域行事や社会活動への貢献が、会員の個人的

なメリットに直結せず、負担と感じる考え方の変化によって、婦人会への加入が敬遠されるようになったためでもある。

平成16年に岩村町と恵那市が合併することになり、婦人会も解散の方向へ進む。当時の渡会直子会長と執行役員は、婦人会解散にあたって様々な困難を乗り越えて、婦人会の歴史を閉じる大役を果たした。その後、これまで婦人会で長年行ってきた下田顕彰碑周辺や墓所の清掃活動を継続させる方法を模索し、役員11名が発起人となり、元婦人会員に呼びかけ、平成18年5月に岩邑うた子会を発足させた。同会の規約には、「下田歌子の墓守りと顕彰碑清掃を主とした目的とし、目的に賛同した者を会員とみなし」とあり、事業の第一に「下田歌子の墓と顕彰碑清掃」を掲げ、現在まで活動を続けている。

下田顕彰碑周辺及び墓所の清掃活動について

戦後最初に顕彰碑清掃についての記事が認められるのは、『昭和廿四年度　記録　岩村婦人會』の中の、昭和26年6月30日の役員会の「下田歌子顕彰碑清掃の件」の記載である。同年7月12日の役員会において、「初回は町で人夫二名に依頼して次回から婦人會で行ふ事に変更」とある。また、『昭和二十八年度以降　事業計画書　岩村町婦人会　第一支会』の昭和28年度の事業計画表の6月に「下田歌子女史顕彰碑清掃」とある。おそらくこの頃から清掃活動は何らかの形で再開したと考えられる。前出の事業計画表は徐々に手書きから印刷へ変わり、事業計画表に清掃の項目が記載されていない年もあるが、38年度には、顕彰碑清掃の項目だけでなく、余白に「以後一、二を除き毎月行う」と補足され、翌年度より「毎月下旬下田歌子先生顕彰碑の清掃を行う。」の一文と、当番班も印刷されるようになる。同年の当番は第一支会の9つの班と第二支会の富田区、飯羽区の計11班で、11月は8班、9班が合同で行う以外は各班に割り当てられ、以後1、2月を除く10か月当番制が平成10年まで続いた。『岩村町合併五十周年記念誌』（岐阜県恵那郡岩村町役場　2004）には、昭和38年の「岩村町の出来事」の「文化」4月に「婦人会が下田歌子顕彰碑周辺の定期的清掃を開始」とある。この頃から清掃活動が婦人会の事業として行政にも認識されていたことがわかる。以降平成16年まで、事業計画表に当番表が印刷されている。実際には同11年から4月も除く9か月当番制になった。婦人会解散後は岩邑うた子会によって、事業が継続され、その際に墓所の清掃も活動内容に明記された。墓所については、平成10年から婦人会役員が年2回行っていた記録があるが、それ以前については今後更なる調査を要する。岩邑うた子会の清掃活動は現在80名弱の会員が6班に分かれ、12月から3月を除く8か月の当番制で行われている。



下田歌子顕彰碑清掃　昭和38年（恵那市役所　岩村振興事務所蔵）

婦人会役員の聞き取り調査

平成27年9月から28年10月までに、数回にわけて婦人会役員を務められた方々からお話を伺った。

浅見弥生氏（昭和57～58年度会長）

浅見弥生氏は、旧家浅見家の九代目で岩村電氣軌道を開通させ、岐阜県会議長、衆議院議員を歴任された浅見與一右衛門の令孫専一郎氏に嫁がれ、現在95歳を迎えられている。浅見氏によれば、婦人会長を務められた当時は顕彰碑周辺のみで、墓所の清掃はしていなかったとのことである。

婦人会資料では就任時から、かなりの頻度で婦人会長が出席する行事や会合が続いていることがわかる。例を挙げると、郡婦連代議員会への出席、恵南地区婦人団体リーダー研修会、社会教育委員会、1歳児・3歳児健診、恵那公衆衛生協議会総会、恵南夏期大学講座、岩村町青少年育成会議、生活学校、婦人のつどい、敬老会、東濃地区婦人の主張大会並

びに婦人大学、交通安全街頭指導、婦人問題を考える県民の集い、八幡神社大祭行列参加、商工会主催秋祭り生オケのど自慢大会審査、熟年大学、消防団演習来賓、町民運動会、消防団出初め式来賓、成人式来賓など、町内のみならず恵那郡や東濃地区の行事や会合への出席も多く、広範な婦人会組織の連携や活動が活発化している様子が窺える。昭和58年には岩村町で第１回産業祭が開催され、会長は運営委員会から参画している。地域婦人学校（書道、華道、民踊などのクラブ活動や研究会を学校と称したものと思われる）の一覧には19組の会名が連なり、婦人会を中心とした地域の女性たちが趣味や教養を高める自主的な活動が盛んであったこともわかる。その他にも岩村城史跡保存会、国鉄明智線問題説明会、岩村町不燃物最終処分場運営協議会、「社会を明るくする運動」街頭パレードへの参加など、地域社会に密接に関わる諸問題にも婦人会が存在感を示していた様子が窺える。

浅見氏は会長就任当時、姑の介護を一人ですべてしなくてはならなかったとのことで、多忙な職務と家事にご苦労されたはずだが、さほど大変ではなかったとにこやかに語られた。昭和36年には書記もされたが、会員名簿をすべて手書きしなくてはならず大変だったと笑っておっしゃっていた。当時会員数は1139名で、間違いなく記録するには神経を使われたに違いない。浅見氏の言葉からは、家事もこなしながら、煩雑な職務もきちんとやり遂げられた自信と誇りが感じられた。

浅見弥生氏とご子息の章氏

後藤歌子氏（平成３年度副会長、４年度会長）

後藤歌子氏は明智から昭和31年に、岩村の元酒造で、当時は酒の小売販売店を営まれていた後藤家に嫁がれた。当時の婦人会は既婚女性が各家から必ず婦人会に所属するような形になっていたが、昭和40年過ぎまでは義姉が婦人会員だったため、ご自身は出ていなかったとのことだ。それでも顕彰碑周辺清掃や墓所の草取りの当番の時には手伝われていた。その後、地区の交通安全委員会長、商工会婦人部長などを務められ、平成３年度に副会長、４年度に会長、その後も再度商工会婦人部長を歴任された。顕彰碑等の掃除当番は岩村だけでなく、富田地区の婦人会も含めて当番を回していたとのことだ。草取りなどの作業に対して、毎年実践女子学園から礼金があったが、当時の実践女子学園との交流は記憶にないとのことだった。

後藤氏が役職に就かれた平成３、４年頃は、岩村のまちづくりが盛んになった時期で、婦人会はその協力団体のような役割も果たしていた。町の行事の手助けや行政の会議への参加も頻繁で、平成４年に開催された岐阜県がやがや会議にも出席された。がやがや会議は陳情ではなく、地域の現状をざっくばらんに話すことを目的とし、県知事や教育長も出席する会だった。この時には、岩村高校がスケートの強豪校であったのに、練習場が近隣に無かったため、岩村にスケート場を作ってほしいという要望を出された。後に恵那たけなみスケート場として要望が実現したとのことで、婦人会の影響力が窺われる。

後藤氏は恵那郡連合婦人会誌『恵那路』第20号（平成４年２月１日発行）に「婦人の大先駆者」である下田の紹介と清掃活動について寄稿され、その中で「昭和十年ごろから、毎月続いている清掃作業奉仕は、その年月の長きに驚きと責任を感ずるところです。」と述べ、清掃活動を受け継ぐ決意を示されている。

（次号に続く）

後藤歌子氏と筆者

（あいこう　はるみ　下田歌子研究所　非常勤研究員）

平尾大社と守芳院（佐久市）

奥島　尚樹

― はじめに ―

下田先生の渡欧について調べるに当たり『下田歌子先生傳』を読み進めていたところ、平尾大社と守芳院という神社と寺院の名称を知ることとなった。下田先生の先祖である平尾氏が開基した寺社ということであり、場所は土地勘のある長野県佐久市なので、実地調査を兼ね訪問してみたところ、寺社の建物とともに下田先生の頌徳碑を拝することができた。

平尾家の家系に関しては『「郷土を拓いた戦国武将平尾守芳とその一統」棚澤龍吉著』に詳しく記載されている。また、実践女子大学短期大学部の髙瀬真理子教授も「下田歌子再考　―血統と家系について―」（歌子No. 5（1997））で詳述されている。

本稿は平尾氏の系譜についてではなく、平尾大社及び守芳院の現在の様子と、守芳院に建立された下田先生の「頌徳碑」について報告する。

― 平尾大社 ―

住所：長野県佐久市上平尾1812

位置は平尾山（標高1155 m）の麓で、社殿は林のなかにあり参道から確認することはできない。平尾山は平尾富士と白山と秋葉山よりなる佐久平を見下ろす古い火山で、平尾富士には木花開耶姫（このはなさくやひめ）を祀った富士浅間神社がある。

現在の平尾山の一角には平尾山公園（佐久ハイウェイオアシス「パラダ」）が整備され、上信越自動車道の佐久平PA（パーキングエリア）から直接アクセスできる自然体験フィールドとして、春は花、夏は昆虫採集、秋は紅葉、冬はスノースポーツと、四季を通して自然を体験できるフィールドとして活用されている。

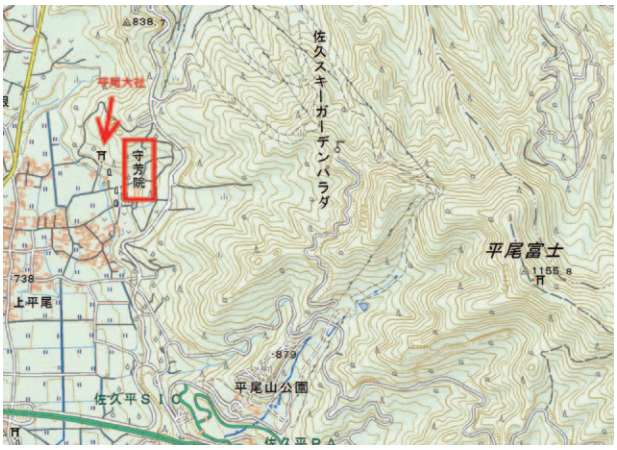


図１：平尾山（平尾大社、守芳院）国土地理院１/ 25000地図より抜粋

図２：平尾大社拝殿（参道より見上げる）

『平尾守芳とその一統』によると、平尾大社は「大永8年（1528）6月、平尾守信は氏神八幡宮へ永拾貫文の田畑山林を寄進し、また拝殿を建立した」ときに始まり、「その後天文年間（1533 - 1554）、正八幡宮を平尾大社と改称（「上平尾村誌」）して今日に至った。」。その後「天正3年（1575）3月、平尾守信の孫となる平尾守芳（平三）により平尾大社本殿が再建される。現在の拝殿は近世の再建」ということであるが、昭和13年の大岡実氏の調査『平根村郷土研究資料・第1集』によると、本殿は「桃山時代の早いもの」とされている。

図３：平尾大社本殿

参道には計6基の鳥居があり、拝殿及び本殿は平尾山の麓斜面に建てられている。参道を登り切ると上から見下ろす形で拝殿が現れ、若干威圧感を感じる作りとなっている。

『下田歌子先生傳』に掲載されている写真は三の鳥居からの撮影の様子だったので、ほぼ同じ位置から写真撮影を試みた。白黒とカラーの差はあるが、さほど違いを感じることはできず、往事の面影が残っていることが確認できる。

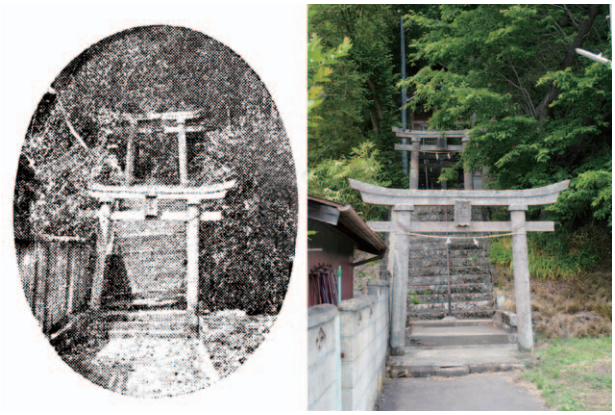


図４：左：『下田歌子先生傳』から、右：現在

― 守芳院 ―

住所：長野県佐久市上平尾1776

守芳院は、平尾大社のすぐそばに建つ、平尾氏ゆかりの寺院である。本堂前に立つ看板には、「當院は天文元年十月平尾弾正守信が本村の字宿と称する地に創建し、南州道運禅師を以て開山となす　其後　弘治三年平尾右近源守芳祖父の志を継ぎ堂宇を修補擴張し名付けて守芳院と云う」と記載されている。守信が創建した際は「皎月庵」と称したが、兵火で消失し、守芳が再建したとされている。

図5：（左）山門の銘、（右）本堂の銘

『平尾守芳とその一統』には「この年（大正九年）の四月二十五日、下田歌子先生は、遠祖平尾守芳の霊を弔いに、信州北佐久郡平根村上平尾（現佐久市）の平尾山守芳院（五代平尾守芳開基）へ親しく参拝された。時に六十七歳。上田市の銀行家平尾正三氏も令嬢同伴で参拝され、戦国佐久の武将平尾守芳を祖先とする三人の初対面は劇的であった。（楜澤敬軒稿「吟詠集」）」と記載されている。また、同書によれば守芳院は、下田先生の書き残した次の歌二首を蔵しているとのことである。

「守芳院に遠祖のみあとをとぶらひまつりて
従三位　歌子
法の道 栄えざりせば 遠つ親の
あともさやかに残らましやは
わしのやまの かほる栞と にほはなん
みおやのもりの花ざくらばな」

さらに同書には「昭和九年の春、下田先生は姪の平尾寿子先生を伴い、十四年ぶりに再度守芳院を訪れた」との記述がある。また、頌徳碑に関して「守芳院には下田先生を顕彰する「頌徳碑」があり、「同年（昭和13年）四月、信州佐久平尾（佐久市）の平尾山守芳院境内にも下田先生の法号「蓮月院殿松操香雪大姉」を刻した祭壇の上に祈念碑「真見実践」が建立され、平尾寿子先生の臨席のもとに厳かに入魂除幕式が行われた。これも守芳院住職岡本大鵬師による下田先生の三回忌法要の営みだったのである。」と書かれている。頌徳碑を説明する看板（平成14年設置）には、「大鵬老師は境内に頌徳建碑を檀越に議り檀信徒の喜捨と協力を得て昭和十三年四月に完成」とある。頌徳碑の表面には次の内容が記されている。裏面には寄進者の氏名が細かく記載されている。

図6：下田先生頌徳碑（全景）

踐實見眞

正二位勲一等伯爵清浦奎吾篆額
従三位下田孺人遂遠碑
孺人諱世起號香雪本氏平尾考諱銕藏美濃岩邑人嗜學有勤王之志遠祖新羅三郎義光義光之孫秀丸為信州平尾城主因氏焉數世之孫良信爲武田氏客將其子平三仕徳川氏食平尾平原一關三邑是爲中興祖平三曾孫信敏仕松平侯侯移封美濃岩邑信敏從焉孺人資性頴悟夙承家學才藻英發兼通和漢洋學善國雅漢詩明治五年甫十七召入宮中補十五等出仕奉　皇后合旨獻國雅一首叡賞賜名歌子任權命婦十二年壱月廟辭十二月嫁東京下田猛雄十四年創立桃夭女塾教育華冑女子十七年猛雄病歿七月再召入宮中家族女學校之設任幹事兼教授尋陞學監二十六年承命視察歐美女子教育英皇特名謁賜饌二十八年歸朝明年命常宮周宮兩内親王教育輔導之任三十一年開設帝國婦人協會明年附設実踐女學校四十一年特旨叙従三位其年投私財三萬円金創完　財團法人私立帝國婦人協會實踐女學校大正九年推愛國婦人會長昭和二年特叙勲三等賜瑞寶章孺人効力女子教育前後五十餘年受業者以萬數聲聞高於一世十一年十月八日病薨壽八十二葬小石川墓域信州北佐久軍平根郁平尾里守芳院實為平尾氏祖墳住持岡本大鵬聞孺人為其後胤來告来由孺人大喜往修追遠之典者前後三次余余茲戊寅大鵬與檀越相謀建碑院中以為記念屬分於余余為本侯教授十有餘年與孺人相知最深誼不可辭為叙梗概云
昭和十三年四月
正四位勲四等　細田謙　撰
天台沙門　豈道慶中　書

図7：下田先生頌徳碑（表面）
（上の写真は碑の「真見実践」の文字）

― あとがき ―

現地調査と言っても専門家ではないので、現地の写真を撮影し、判読できる碑文を探すぐらいのところである。しかし、書籍に記載されている場所を自分自身の足で歩くことで、下田先生の歴史の一端を垣間見ることができるとともに、悠久の時の流れを肌で感じることもできる気がしてくるのは、大変楽しいことである。

下田先生ゆかりの寺社ということで、一度足をお運びいただけると幸いである。

（おくしま　なおき　香雪記念資料館　事務室部長）

参考資料：
1）楜澤龍吉著『郷土を拓いた戦国武将　平尾守芳とその一統』（株）櫟（いちい）　昭和62年
2）髙瀬真理子著「下田歌子再考　―血統と家系について―」『歌子』（日本語コミュニケーション学科学科誌）No.5, 1997（平成9年）
3）『下田歌子先生傳』故下田校長先生傳記編纂所　昭和18年
4）平尾寿子著『下田歌子回想録』山陽社　昭和17年
5）『大日本寺院総覧』名著刊行会　昭和41年
6）国土地理院「電子地形図 1 / 25000」　オンライン

平成28年度　下田歌子研究所活動報告

下田歌子研究所　事務室

実践女子学園の創立者である下田歌子は、明治時代、女性の社会的地位がほとんど問題にされなかったときに、いち早く女性の地位向上をめざし、その基礎が中堅女子の教育にあることを見抜き、確信し、実践しました。日本における女子教育の先駆者であった下田歌子。その信念と行動は、本学園の「実践」という校名に表され、その精神は、建学以来約120年にわたって、本学園に引き継がれています。実践女子学園は、明治・大正・昭和三代の新たな時代に相応しい女性の生き方を模索し、広くひとびとに示そうとした下田の精神を学ぶため、2014年4月、下田歌子研究所を設立しました。

ここで、平成28年度上半期の下田歌子研究所の活動をご紹介します。

第14回　下田歌子賞募集記念　特別展示及び講演会
「明治の女子教育者・歌人 下田歌子 ―家庭は最良の学校なり―」

（平成28年6月27日～7月20日）

特別展示

【日　時】平成28年6月27日（月）～7月20日（水）9：00～22：00
【会　場】東海市芸術劇場２階　嚶鳴広場
（愛知県東海市大田町下浜田137番地ユウナル東海内　名鉄太田川駅西口前）
【テーマ】「明治の女子教育者・歌人下田歌子―家庭は最良の学校なり―」
「建物写真で見る実践女子学園の120年」

全国からエッセイ及び短歌を募集する第14回「下田歌子賞」を記念して、下田歌子賞募集のテーマでもある「家族」に因み、下田先生の曽祖父・平尾他山及び祖父東條琴台の肖像画賛、父平尾錄蔵宛の書簡や父・母（房）の油絵パネルを展示しました。

また、下田歌子の著書や学園の歴史などを紹介しました。

特別講演会

「揺りかごを動かす手は、世界を動かす」
実践女子大学下田歌子研究所　所長　湯浅　茂雄
【日　時】平成28年7月9日（土）　14：00～15：30
【会　場】東海市芸術劇場２階　嚶鳴広場

展示の様子

当日は雨天にもかかわらず下田歌子に興味を持たれた方や、子供を持つ若い世代まで幅広く、たくさんの方が聴講され、下田歌子の生涯、女性として教育者としての生き方や考え方などに熱心に耳を傾けてくださいました。もっと下田先生のことを知りたいという意見や様々な質問があり、盛況のうちに終了しました。

湯浅茂雄所長講演

講演会の様子

自校教育への取り組み
「学長と行く、学祖故郷の旅（岐阜県恵那市岩村）」参加、特別講演

（平成28年9月5日～7日）

毎年、学生が学祖に対する理解を深めることを目的に実施している「がくたび」に参加しています。参加学生たちと下田先生のお墓参りをした後、岩村町を散策し、下田先生ゆかりの場所を訪ねます。下田先生の勉強部屋を再現した勉学所や綾錦の顕彰碑などを見学し、それぞれの解説を聞きながら、上京する際の先生の決意やその想いの強さに感銘を受けた学生も多く、中には自分を重ね合わせて気持ちが引きしまると話す学生もいました。

また、自校教育のワークとして、講演で学んだことや下田先生に関するクイズ大会

がくたび：墓参（岩村）

を催すなど学生に学祖を理解してもらう良い機会となりました。

特別講演会

【日時】平成28年9月6日（火）
9：00～10：10「下田歌子に学ぶ」
実践女子大学下田歌子研究所
所長　湯浅　茂雄
10：20～11：30「健康を保つ食生活－ウソとホント」
実践女子大学・実践女子大学短期大学部
学長　田島　眞
【場所】岩村コミュニティセンター（大会議室）
「がくたび」の２日目に自校教育として実施する講演を岐阜県恵那市岩村町の皆様にもご聴講いただきました。

がくたび：岩村町散策

がくたび：顕彰碑にて

がくたび：湯浅所長講演

がくたび：湯浅所長講演

研究会の実施
研究会を開催　―淡海女子実務学校旧校舎を訪問―

（平成28年9月25日）

下田歌子研究所では、下田先生の思想や事績研究、関係資料の掘り起こしや実地踏査を行っています。また、関係地域の皆様との連携を図り、新たな研究につなげるとともに、今後のさらなる事業展開を模索しています。

今年は、淡海女子実務学校旧校舎がある滋賀県東近江市五個荘で研究会を実施しました。

淡海女子実務学校（後の淡海実践女学校）は1919年（大正8年）、近江商人の妻で下田先生の和歌の弟子でもあった塚本さとが私財を投じて設立しました。下田先生は、嘉悦孝子先生（嘉悦学園創設者）、杉浦重剛先生とともに顧問に就任し、1925年（大正14年）より淡海実践女学校と校名を改め、校長を引き受けました。

今回の研究会では、淡海女子実務学校旧校舎や近江商人博物館、株式会社ツカモトコーポレーション資料館「聚心庵」を訪問しました。「聚心庵」を見学できるのは、東近江市が企画する「ぶらりまちかど美術館・博物館」開催日のみで、年に一度だけです。五個荘は商人の町としても有名で、「聚心庵」では、塚本定右衛門家資料館として商人の想いと歴史を展示するほか、塚本さとや淡海女子実務学校に関係する資料などもたくさん展示しています。今回は、藤堂泰脩館長に館内をご案内いただきました。

商家の妻は、家庭を守り支えることはもちろん、奉公人への教育や礼儀作法を教え、家の財産だけでなく商品の管理に至るまで行うなど重要な役割を担っていました。そのため、家庭を守る力だけでなく、女性として高い知識と教養が必要となり、様々な実地教育を受けていたそうです。塚本先生の女子教育にかける想いが伝わってきます。また、研究会当日は、近江商人屋敷も見学することもできました。商家の台所で、下田先生著『女子の修養』（初版本）を発見し、当時の商家の女子教育に下田先生の著作も使われていたことを知ることができました。

淡海女子実務学校旧校舎

聚心庵

中央：藤堂館長

商家の台所にあった下田歌子著『女子の修養』

下田歌子先生のご命日（10月8日）
―下田歌子先生没後80年―

（平成28年10月8日）

護国寺墓参

10月8日のご命日は、毎年、護国寺に墓参をし、下田先生に研究所の活動をご報告しています。

墓参（護国寺）

下田歌子先生ご命日特別展示

今年は、没後80年という節目の年です。

ご命日の10月8日は、もっと学生に学祖のことを知ってもらうため、学生向けの特別展示を学内で実施し、下田先生の功績や著作本などを紹介しました。

学生のことをわが娘（子）のように思い、教育を通して女性たちがその力を発揮できるようになることを終生願っていた下田先生。その想いを学生に伝える機会をこれからも増やしていきたいと思っています。

下田先生ご命日特別展示

下田歌子及び学園の歴史資料収集

資料収集

下田歌子研究所では、未だ明らかになっていない学園の歴史や下田先生の事績がわかる資料の収集に力をいれております。今年度も右掲の資料をご寄贈いただきました。

新収資料の展示

毎年、渋谷及び日野キャンパスの常磐祭で下田先生と実践女子学園の歴史を展示しています。ご寄贈いただきました資料の一部をこちらで展示しております。今年度の日野キャンパスの常磐祭では、卒業生をお招きし、ホームカミングデーが実施されました。その会場で学園の歴史を振り返っていただくため、ご寄贈いただいた卒業アルバムなども展示しました。お越しいただいた卒業生の皆様は、学生時代を懐かしみ、思い出話に花を咲かせていらっしゃいました。

図書：和服裁縫（教科書）

卒業アルバム：想ひ出　2596

色紙：湊川懐古

資料形態	書名（題名、内容）	資料形態	書名（題名、内容）
絵	顕彰碑の絵	通学証明書	実践女学校時代の通学証明書（昭和12年）
小物入	下田歌子から受贈の小物入及び書簡	図書	女子の修養（大正3年）
色紙	湊川懐古	図書	日本刺繍講話（昭和11年）
写真	関係者写真	図書	毛糸とレース編物（昭和12年）
写真	顕彰碑の写真	図書	和服裁縫 プリント収録本
書簡	下田歌子差出書簡	図書	和服裁縫細目 プリント収録本（昭和15年）
書簡	下田歌子宛書簡	図書	新手芸ドローン・ウォーク（昭和11年）
書簡	書簡二通	図書	国際画報（大正12年）
卒業アルバム	実践女子専門学校技芸科　第八回卒業記念（昭和15年）	図書	国際寫眞情報（大正12年）
卒業アルバム	想ひ出 2596（昭和11年）	図書	歳月　昭和の覚え書き（平成23年）

渋谷キャンパス 常磐祭展示（10月15・16日）

日野キャンパス 常磐祭展示（11月12・13日）

ホームカミングデー（11月12日）

下田歌子著作集の復刊作業

現在、下田先生の著作は絶版となっているため、学生や生徒、一般の方が下田先生の著作や言葉に触れる機会が得られない現状に鑑み、重要性の高いものから、その著作のデジタル化を行い、これを基礎に『新編下田歌子著作集』として著作の復刊をしています。

平成28年3月には『婦人常識訓』を語釈付で復刊し、今年度は『女子のつとめ』、来年度以降は『良妻と賢母』、『女子の心得』と続刊を予定しています。

新編下田歌子著作集『婦人常識訓』

下田歌子研究所は、下田歌子の建学の精神を踏まえ、現在・未来において女性たちがよりいきいきと活躍できる社会の構築を目指し事績研究をはじめ、講演会開催、刊行物の発刊や関係地域との連携などの活動を通して社会に資する施策・思想を発信していくことを目的としています。最後まで、教え子たちを想い、生涯を日本の女子教育に捧げた学祖下田歌子。その想いを生徒・学生に、そして未来へ繋げていくために……

（文責：竹田真由子）

先人学研究フォーラムのお知らせ

次のとおり、先人学研究フォーラムで湯浅茂雄所長が講演、横山幸司研究員がコーディネーターを務めます。

【先人学研究フォーラム開催要項】

先人学とは、地域の先人について学び、それをどのように後世に伝えるか、さらには、現代の教育やまちづくりに活かすことができるか、そのために必要・有効なシステムを考える学びです。

このフォーラムは、滋賀大学社会連携研究センターをプラットフォームにして、各方面で活躍する団体や機関が集い、先人学について学びあう場です。

【日　時】 平成29年2月12日（日）
【会　場】 しがぎん草津ビル（滋賀銀行 草津支店）
〒525 - 0032 草津市大路1丁目14 - 26
【主　催】 滋賀大学 社会連携研究センター
【共　催】 しがぎん経済文化センター
【後　援】 滋賀県教育委員会
【問合せ】 滋賀大学　教育学部企画係
TEL 077 - 537 - 7701 FAX 077 - 537 - 7840

プログラム

13：00 受付
13：30 開会 主催者挨拶　滋賀大学
13：40【基調講演】
「下田歌子がめざしたもの」 実践女子大学 下田歌子研究所所長　湯浅 茂雄
15：10 休憩
15：20 パネルディスカッション
【 パネラー 】オレガノ 副代表　城念 久子
NPO 法人 高島藤樹会 藤樹人間学塾塾長　田中 清行
実践女子大学 下田歌子研究所所長　湯浅 茂雄
【コーディネーター】滋賀大学社会連携研究センター教授　横山 幸司
16：50 閉会 共催者挨拶　しがぎん経済文化センター
17：15 懇親会

＜会場＞しがぎん草津ビル

下田歌子研究所 今後の刊行予定

下田歌子研究所年報『女性と文化』第３号　平成29年３月刊行予定
『新編下田歌子著作集　女子のつとめ』　平成29年３月刊行予定

資料ご寄贈のお願い

下田歌子研究所では、学園の歴史や下田歌子先生の事績がわかる資料収集に力を入れています。下田先生ゆかりの品、写真、卒業アルバム、当時使っていた教科書やノート、学園の歴史がわかる資料で、ご寄贈可能なものがございましたら、下田歌子研究所までご連絡ください。皆様の寄贈される資料が学園史の貴重な手掛かりになりますし、学園の財産ともなります。120年の歴史を未来へ繋げるために、ぜひご協力ください。

連絡先
担当部署　実践女子大学下田歌子研究所
電話＆FAX　042 - 585 - 8495
Mail　shimoda-ins@jissen.ac.jp

『ニューズレター』No.08
発行：2017年1月19日　編集・発行所：実践女子大学 下田歌子研究所
〒191-8510　東京都日野市大坂上4-1-1　電話・FAX：042 - 585 - 8945　E-mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp
印刷：日野テクニカルサービス株式会社